

奈良国立文化財研究所 旧春日野庁舎について

— 旧 奈 良 県 物 産 陳 列 所 —

建 造 物 研 究 室

奈良公園の一画に和風建築に洋風のデザインを一部にとり入れた旧奈良県物産陳列所の建物がある。昭和57年11月に重要文化財に指定されたこの建物は、奈良国立文化財研究所が昭和27年4月から昭和55年3月まで庁舎として使用していた。建造物研究室は、この建物の実測調査を行い、古写真や資料を収集した。調査の結果、明らかになった点をまとめる。

建設の経過と沿革 明治30年12月23日の県議会で、予算23,765円87銭5厘の建築費・二ヶ年の計画で物産陳列所の設置が決まった。明治32年12月20日に、30,000円を追加し、明治35年度完成を予定した。明治33年5月4日には敷地地均し、囲い、監督事務所の入札、同年8月10日には礎石切据工事の入札の告知が出され本館建築工事の準備が進行し、11月18日には起工の運びとなった。礎石切据工事の入札告知のあと、本館建築工事についての入札告知の記事は見当らず、奈良県庁舎（明治28年）や奈良県立図書館（明治42年）など県関係の建築工事同様に、物産陳列所も直営工事で施工されたのであろう。明治33年11月28日の県議会では、本館内部の器具や職員費用の予算が計上され物産陳列所開館の準備が進められている。明治34年9月の鬼瓦銘や同年11月の飾り瓦銘から、この頃には瓦が葺き終るほどまで建築工事が進み、明治35年3月10日に本館は竣工した。設計者は本人の日記から当時奈良県技師であった関野 貞と考えられている。設計当時の資料としては明治33年12月18日の書き込みのある、本館背後からの透視図（写真2）があるにすぎない。正面からの透視図があったと想像されるが、平面図・断面図などとともに未発見である。

奈良県物産陳列所規則が明治35年2月18日に定められ、同年9月1日に開館した。その後、

奈良県商品陳列所・奈良県商工館物産陳列所・奈良県商工館と名称を変えた。機構の変化や業務の拡大のたびに、本館背後に付属の建物が増築された。付属の建物のうち本館裏手の土蔵は物産陳列所と同時に建設されたと考えられる。

建物の概要 本館は、全体の構成を平等院鳳凰堂を模していて、中央部・翼部・楼部の三部分に分かれる。(図1) 本館の規模は桁行総長222.5尺(67,423m)、梁間は中央部が45尺(13,636m)、翼部が30尺(9,091m)、楼部が36尺(10,909m)である。実測寸法はばらつきがあるが、本館は曲尺で設計されていると考えられる。建物は木造桧瓦葺、屋根は中央部が入母屋造、楼部が宝形造を基調とするが、切妻屋根や入母屋破風を取付けて全体は複雑な屋根を構成している。翼部には越屋根がつく。小屋組はトラス組であるが、虹梁・組物・簷股の細部には日本建築の様式を採用し、窓にはイスラム建築のデザインを取り入れている。(写真1)

中央部正面の車寄は昭和10—12年頃に多少改造されたが、外観全体は大きい変更はない。本館内部は、奈良国立文化財研究所が発足する際、昭和27年に大きく改造されている。広い展示スペースに間仕切を設けて分割し、研究室・事務室を設けた。また中央部ホールの吹き抜けに二階をつくり、所長室・会議室を設けた。本館の窓は採光のため床から高く設けられていたが、研究所庁舎に改造する際に床をあげて、目通りに調整した。西楼部など一部には、物産陳列所の床が旧状のままのこっている。翼部には3条のアーチ状リブが架っていたが、昭和27年に撤去された。東楼部上方や、翼部越屋根内部には収納のため部屋がつけられた。旧奈良県物産陳列所の現状は、内部が昭和27年改造によるものの、外観はほぼ当初である、と言えよう。

本館の基礎は、内側にコンクリート基礎があり外側を切石で化粧している。明治34年には、奈良県関係の建築工事にコンクリート基礎が採用されており、物産陳列所が直営工事と推定されることを併せて考えると、本館のコンクリート基礎が当初と考えても問題はない。コンクリート基礎については、今後の検討がさらに必要だが、建設当初とするとコンクリート基礎を使用した早い事例といえることができる。(上野邦一)

付記：本館の改造については、昭和10—12年に奈良県職員、昭和27年に奈良女子大学施設課施設係長で、二度の改造工事を担当された黒田義男氏から多くの御教示を得た。

中央正面

透視図